

大淵貴之著

『唐代勅撰類書初探』

研文出版 二〇一四・一〇刊
A5 一三〇頁 四五〇〇円

本書は、『藝文類聚』を始めとする唐代勅撰類書を対象に、類書
の概念、勅撰類書の編纂と政治との関係、編纂当時のテキストに
対する政治の影響や後代におけるテキストの変容の問題などを、
緻密な考察によって裏付けた唐代類書に関する初の專著である。
以下、章ごとに紹介する。

第一章「唐代勅撰類書の中核概念」は、唐初までの類書は、工
具書というよりも、皇帝の能率的な群書閲覽に供する雑家書的な
「帝王学書」であり、典籍利用の恵みを臣下に与える目的の『藝
文類聚』はむしろ異質で、『群書治要』こそ唐初勅撰類書の性格に
沿うものであったとする。

第二章「類書勅撰の政治的意義」は、『藝文類聚』を具体例に、
勅撰類書の編纂意図を明らかにする。『藝文類聚』は、当時皇位継
承争いが白熱化する時期に、劣勢にある太子派が手柄を立てるた
めの事業であったと把握する。

第三章「唐代類書に見える避諱の影響」は、既存文献の抄録書
である類書編纂においても避諱処理が確実に行われていたことを
明らかにする。未だ缺筆がない時代に、『藝文類聚』の避諱処理は
改字によって行われたが、改字に対応できない「淵」と「虎」の

部は不成立とされ、「白虎」の部は「驕虞」と類義語によって改め
たと指摘する。

第四章『藝文類聚』本文批判の「指標」は、『藝文類聚』に新
設された「文」の部分の採録原則を立証する。現行テキストにお
ける複数部立て重出の詩文は、後世の補綴・改竄である可能性が
高いと指摘し、詩文採録における編集原則を「一詩文一部立て」
と証明する。『藝文類聚』の「文」の元の姿に迫り、唐初の文学観
の研究により精確な材料を提供する。

第五章「南宋出版時における『藝文類聚』の条文修補」は、『藝
文類聚』への条文移入及びその時期と動機を分析する。前章で立
てた詩文採録原則を手がかりに、『藝文類聚』の始め数巻の巻末に
位置する部立てに『初学記』の条文が移入していることを多数指
摘した。これは、王朝交代後、類書の資料集的性格への変容を背
景として、印刷事業が経史子集全般にわたった南宋に行われたと
する。

第六章「伝承過程における『白氏六帖』の部立て増修」は、「山」
部を例に、『藝文類聚』・『初学記』の相当部分を現行の宋版『白氏
六帖』と詳細に比較し、両書による『白氏六帖』の全面的な部立
て増修を明確化し、現存本の千三百余門と史料記録の二百余帖と
の矛盾を解決する。かかる大幅増修は、抄本から刊本へと転換し
た後蜀の毋昭裔による出版を契機に行われたのではないかとする。

第七章『白氏六帖』と白居易の判」は、『白氏六帖』中に潜在
する、白居易の他に用例のない四六対偶群を彼の判文の草稿段階
に当たるものとする。『白氏六帖』勅撰説を補強し、その成書の実

態に迫る。

本書は従来の概論的な研究とは異なり、着実な考証によって類書の含む豊富な情報を提示した史的研究である。著者が強調するように、類書は単に諸文献を網羅的に収載するだけでなく、統治者による万物掌握を象徴するものである。そのため、類書の編纂と内容は当時の政治と深く関わるものになった。しかし、王朝が交代すると資料集としての性格が重視されるようになった。抄本から刊本への転換における、追改・増補によるテキストの変容についての著者の指摘も無視できない。こうした問題点に鋭く切り込んだ本書は、類書を利用する歴史・思想・文学の研究者にとって必読の一冊である。

(付 晨晨)